研究ノート

海外における「リカードウ派」社会主義者研究の最近の動向（I）

上　野　　格

近年，特に1980年代に「リカードウ派」社会主義者の研究が海外の文献で目立つようになった。筆者の管見でも，次のような単行本および論文がある。

I．研究書

1) Hunt, E. K.,
History of economic thought : a critical perspective, Wadsworth Publishing Company Inc., Belmont, California, 1979.

2) Samuel, Raphael, (ed.)
People's history and socialist theory, Routledge & Kegan Paul, London, 1981.

3) Thompson, Noel W.,
The people's science — the popular political economy of exploitation and crisis 1816–34, Cambridge U. P., 1984.

4) Satfford, William,
Socialism, radicalism, and nostalgia — social criticism in Britain, 1775–1830 Cambridge U. P., 1987.

5) Thompson, Noel W.,
The market and its critics — socialist political economy in

nineteenth century Britain, Routledge, London, 1988.

6) King, J. E.,
Economics exiles, Macmillan, London, 1988.

7) Claeys, G.,
Citizens and saints — politics and anti-politics in early British socialism, Cambridge U. P., 1989.

＊ Osier, J-P.,
Thomas Hodgskin : Une critique prolétarienne de l'economie politique, Paris 1976.

Ⅱ. 研究論文

8) Thweatt, william O.,
"The digression on Sismondi : by Torrens or McCulloch?" *History of Political Economy* 6 (1974) : 435-453.

9) Dinwiddy, J. R.,
"Charles Hall, early English socialist", *International Review of Social History* Vol. XXI (1976) : 256-276.

10) Hunt, E. K.,
"Value theory in the writings of the classical economists, Thomas Hodgskin, and Karl Marx", *History of Political Economy* 9 : 3 (1977) : 322-345.

11) Hunt, E. K.,
"Utilitarianism and the labor theory of value : a critique of the ideas of William Thompson", *History of Political Economy* 11 : 4 (1979) : 545-571.

12) O'Brien, D. P., and Darnell, A. C.,
"Torrens, McCulloch, and the "Digression on Sismondi" : whose

digression?" *History of Political Economy* 12 : 3 (1980) : 383-395.

13) Thweatt, William O.,
"Torrens, McCulloch, and the "Digression on Sismondi" : whose digression? A reply", *History of Political Economy* 12 : 3 (1980) : 396-411.

14) O'Brien, D. P., and Darnell, A. C.,
"A Rejoinder", *History of Political Economy* 12 : 3 (1980) : 411-419.

15) Perelman, Michael,
"Edmonds, Ricardo, and what might have been", *Science and Society* 44-1 Spring (1980) : 82-85.

16) Hollander, Samuel,
"The post-Ricardian dissension : A case-study in economics and ideology", *Oxford Economic Papers* (New Series) 32 : 3 Nov. (1980) : 370-410.

17) Hunt, E. K.,
"The relation of the Ricardian socialists to Ricardo and Marx", *Science and Society* 44-2 : Summer (1980) : 177-198.

18) Claeys, Gregory and Kerr, Prue,
"Mechanical political economy", *Cambridge Journal of Economics* 5 (1981) : 251-272.

19) King, J. E.,
"Perish commerce! Free trade and underconsumption in early British radical economics" *Australian Economic Papers,* December (1981) : 235-257.

20) King, J. E.,
"Utopian or scientific? A reconsideration of the Ricardian

socialists", *History of Political Economy* 15 : 3 (1983) : 345–373.

21) Vivo, Giancarlo de,
"The author of the article on Owen in the October 1819 Edinburgh Review : some neglected evidence. With a reply by William O. Thweatt" *History of Political Economy* 17 : 2 (1985) : 199–202.

22) Henderson, James P.,
"An English communist, Mr. Bray [and] his remakable work", *History of Political Economy* 17 : 1 (1985) : 73–95.

これらの諸研究を，1) 匿名論文の筆者を特定する論争（以上本号，以下次号）

2) いわゆる Ricardian Socialists をグループとしてとらえ，Ricardian という名称は正しいか否かを改めて問い，また，そのリカードウまたはマルクスとの関係を再考する研究

3) いわゆる Ricardian Socialists を個別に研究または紹介する研究

以上の三項にわけて検討したい。

1) 匿名論文の筆者を特定する論争

A：Piercy Ravenstone とは何者か

レイヴンストーンは，*A few doubts as to the correctness of some opinions generally entertained on the subjects of population and political economy,* 1821. などの著者として知られ，通常「リカードウ派」社会主義者の一人とされているが，以前から誰かのペンネームであろうとされていた。例えば，マックス・ベアも『英国社会主義史』の中でそのように述べている。それを，Richard Puller なる人物の筆名であると主張したのはスラッファであった。彼は著者の手沢本と見られるものを調べ，表

題紙の著者名 Piercy Ravenstone, M.A. が線で消されて Richard Puller と書き加えられており，本の背に Puller on Political Economy と印されているのを発見した。これは同時代の記入であるという。また，それとは別の，ミラノのフェルトリネリ図書館の所蔵本の扉には，'The real author of this book was Richard Puller, brother of Sir Christopher Puller, Chief-Justice of Bengal, and uncle of Christopher Puller, member for Hertfordshire about 1858. The present head of the family is Charles Puller, of Youngsbury, Herts.' と記されているという。但し，この Puller なる人物については，イングランド銀行理事であった祖父 Christopher Puller の遺言書（1789年10月2日付）に名前が記されていることや，南海会社の理事であった同名の父 Richard Puller（1746-1826）の土地を1827年に相続したこと以外は殆ど何も分かっていない。Charles Puller が上記の Youngsbury を相続したのは1885年，亡くなったのは1892年であることから，扉への記入はこの8年足らずの内にされたものと考えられている（*The works and correspondence of David Ricardo*, Vol. XI, Cambridge, 1973, p. XXVIii.)。

以上のことは，かなり早い時期に杉原四郎教授が紹介しておられたように記憶するが，最近にいたるまで海外の文献では正体不明の扱いであった（例えば［3］N. Thompson 1984)。従って，このスラッファ説はあまり承認されていないのかと筆者は推測していたが，漸く肯定する記述に出会った。［4］W. Stafford 1987がそれである。彼は「20年ほど前からこの著者の本当の名前は Richard Puller であることが確証されてきている，彼については殆ど何も知られていない」（p. 4）と甚だ簡単明瞭に記し，スラッファの上記のページを註に記している。

しかし，事柄は実はスタフォードの言うほど単純明快ではない。レイヴンストーンの *A few doubts*..... の復刻版を Kelly から出した J. Dorfman は，その序文で著者を英国国教会の牧師 Edward Edwards と推

測している (Dorfman 1966, p.16-21)。スラッファは上記の箇所でこれについて言及し「この推測を裏書する証拠は何も見当たらない」と一蹴しているが，J. E. King はレイヴンストーンが誰であるかは依然として謎であるとして，Edward Edwards でありそうな有力な状況証拠があること，1820年代に彼は *Quarterly Review* に時事経済問題を執筆していることなどの Dorfman 説を紹介している。しかし同時に，キングは，スラッファ説も直接的な証拠に基ずく説として紹介しており，本人の立場を示さずにいる ([20] J. E. King 1983. p. 345 脚註)。スラッファ説になかなか組しえないのは，R. Puller なる人物がどのような生活者であったかが不明なこと，換言すれば，エドワーズほどの「状況証拠」が見当たらないことによるものであろう。

B：Mr. Owen's plans for relieving the national distress, *Edinburgh Review*, Vol. 32, October 1819. の筆者について。

この論文は，ロバート・オウエンの提起した国民的難況克服策が全く幻想的で，誤ったものであると，リカードウ経済学の原理に基ずいて主張する内容のもので，当時のリカードウ派経済学者たちの「社会主義」批判の最も代表的論文として知られるものである。内容は三種の記述からなり，第一は，トレンズが1819年7月26日にロンドンで行ったオウエン計画批判の講演の丁寧な書き換え，第二はトレンズ講演の殆ど文字通りの引用，そして，その中間に挿入された，シスモンディを「セイ・J.ミル的市場法則」を用いて批判する論稿という構成になっている。匿名論文であるが，リカードウを始めとして現在にいたるまで，大方の研究者がトレンズの著作と推測してきている（例えば，L. Robbins, *Robert Torrens and the evolution of classical economics*, London, 1958. pp. 278-80.)。

この論文のうち第一と第二の部分，すなわちトレンズ講演の部分は，1819年8月21日の *Scotsman* 紙に "On Mr. Owen's plan, and the causes

of the present distress." というタイトルで紹介されたものと殆ど同じものである。そして，この *Scotsman* 紙の編集者が当時マカロックであり，また，シスモンディ批判はあまりトレンズの理論的立場となじまないことから，筆者は実はマカロックであるという説が，W. O. Thweatt によって強く主張された（[8] W. O. Thweatt 1974)。

マカロック説の根拠は，1）トレンズの「セイ・J．ミル的市場法則」利用はリカードウの *Notes on Malthus* に依拠するものであり，トレンズは1821年の *An essay on the production of wealth* でマルサスへの反論をこの立場でおこなっているが，この *Note* をトレンズは利用出来なかった筈で，マカロックがこの *Note* を利用して書いた *Edinburgh Review*, March 1821 の論文 "Effects of machinery and accumulation" で知ったと考えられる。したがって，1819年のオウエン批判論文ではトレンズはまだそのような理論的立場には立てずにいた。2）リカードウがマカロック宛の手紙でこのオウエン批判論文の筆者をトレンズとしているのに（28 Feb. 1820)，マカロックは自分が筆者だと名乗りを挙げていないのはおかしいと思われるかもしれないが，それはマカロックがトレンズの講演に大きく依存して書いたため申し出にくかったのである。3）ロンドン講演でトレンズは経済的難況の対策として植民政策を強く主張しているが，オウエン批判論文ではその部分がすっかり削除されている。トレンズが熱狂的な植民政策論者であることと考え合わせるとこれは異常なことであるが，この政策に冷淡であったマカロックが筆者であれば当然の処置になる。4）トレンズは多くの場合「セイ・J．ミル的市場法則」批判者であった。5）トレンズは他の著述ではシスモンディには全く言及していない。6）*Edinburgh Review* への主たる経済論文執筆者はマカロックで，トレンズはこの頃より40年もたたなければ，寄稿出来なかった。7）シスモンディはマカロックを筆者としている。簡単にまとめれば以上のようになろうか。

このマカロック説を *History of Political Economy* 誌編集者は重要な問

題提起と評価したらしく，1980年の第12巻3号に，O'Brien と Darnell による批判，Thweatt の反論，O'Brien と Darnell による再批判を一挙に掲載した。（[12] [14] O'Brien & Darnell, [13] Thweatt, 1980.）

[12] で，オブライエンらは非常に興味ある事実を紹介している。それは，スラッファとヴァイナーの間で，既にこの筆者問題について手紙による意見交換があったということである。オブライエンは書簡の日付を記していないが，Thweatt [13] によれば，ヴァイナーの書簡は1943年9月のものである。（[8] 論文ではスエットはこの往復書簡に言及していない。Thweatt [13] ではヴァイナー・スラッファ往復書簡に言及し，また，J. S. Chipman がその論文 "A survey of the theory of international trade: Part 2, the neo-classical theory", *Economica* 33, no. 4 (Oct. 1965) ではトレンズ説をとったが，その直後ヴァイナーから，スラッファ・ヴァイナー往復書簡の存在と，筆者については意見が別れたままであったこと等を手紙で知らされたこと，さらに，1966年6月にチップマンはヴァイナーにあてた手紙で，少なくともシスモンディ批判の部分では McCulloch had played a role in the composition of the article と言うヴァイナーの意見に同意する旨書き送っていることを紹介している。McCulloch played a role というのを，スエットはマカロック執筆説と解して，チップマンをヴァイナー・スエット陣営に加えている。スエットは [8] 論文発表後に I learned of this fascinating correspondence と記しているが，この correspondence はヴァイナー・チップマン往復書簡のことらしく，ヴァイナー・スラッファ往復書簡の存在を [8] 論文執筆の段階で知っていたか否かははっきりしない。）

O'Brien [12] の伝えるところでは，Viner Papers は公開されておらず，彼らは D. Winch の世話で読むことが出来たという。ヴァイナーは著書 *Studies in the theory of international trade*, 1937. の中で，このオウエン批判論文の筆者はおそらくマカロックであろうとしているが根拠は示していない。それで，スラッファはリカードウ全集編集にあたって，マカロック説の根拠をヴァイナーに求めたらしい。ヴァイナーは，マカロックが

Edinburgh Review への経済論文執筆の独占権を主張していたこと（1819年から29年を含む12年間にわたって），シスモンディ批判に見られる「セイ・J．ミル的市場法則」賞賛はトレンズの理論的立場ではないこと，マルサスがこの論文の筆者はトレンズだとシスモンディへの手紙に書いているのに（March 12th 1821.），シスモンディはマカロックが筆者だと，彼の著書 *Nouveaux principes* 第2版1827。に新たに脚註をくわえて記していることなど，六項目の根拠を書き送ったが，スラッファは賛成せず，トレンズ説をかえなかった（マルサスの書簡および *Nouveaux principes*, 1827. での脚註などについては，*The works and correspondence of David Ricardo,* Vol. VIII, p.376. 参照）。Thweatt［8］でのマカロック説の論拠は，ヴァイナーの論拠と殆ど同じである。

オブライエンらのスエット批判はかなり説得力のあるものである。彼らによれば，リカードゥの手紙は明瞭にトレンズを筆者と断定しており，マカロックの返信にはそのことへの言及はない。もしマカロックが書いたとしたら，ロンドン講演の内容をそっくり剽窃したような論文をみて，むずかし屋のトレンズが黙っている筈がない。植民・移民政策についてはマカロックも早くから熱心な賛成論者であって，この点でトレンズとマカロックに何の相違もなく，従って，スエットの言う植民政策削除問題はマカロック説の根拠たりえない。スエットの言うように，確かにトレンズは「セイ・J．ミル的市場法則」批判者であったが，彼の立場はこれに関して一貫性がないため，根拠たりえない。シスモンディへの言及がトレンズの他の論述に見られないというのは，取るに足りない事柄である等々。また，経済論文独占についても，マカロックの要求にも拘らず，現実には独占出来ていなかったことをオブライエンらは確かめている。

このような論拠は，しかし，いずれも動かし難い確証というわけにはいかない。それで，オブライエンらは，おそらく経済学史研究では初めての，電算機による文体調査によって，トレンズとマカロックの文章のそれ

ぞれの「指紋」を検出し，問題の論文がどちらの筆になるものかを探ろうとする。取り上げるのは，第一にオウエン批判論文の三部分（ロンドン講演のパラフレーズの部分，直接的引用の部分，シスモンディ批判の部分）であって，この三者が同一人物の筆になるものか否かを検討する。第二にはトレンズの *Essay on the prodution of wealth* 中の一部とロンドン講演のフル・テクスト，マカロックの *Principle* 中の同じ問題を扱っている部分と *Edinburg Review* のなかの "The effects of machinery and accumulation" で，それらのうちどれにオウエン批判論文と類似する文体が検出されるかを探ろうとするのである。取り上げるのは，But, In, The/If. And/This などが文頭に来る割合と，Be が Will, Can, Must, Shall, Would, Could, May, Might, Should, To などに続いて用いられる割合である。オウエン批判論文の三部分は，同一人物の文体であることが，この電算機処理によって確認され，また，第二，すなわちトレンズの二つの論文は同一人物の文章であり，それとは別の人物の文章上の特徴がマカロックの二論文には共通に検出された。さらに，トレンズの第二の二論文とオウエン批判論文との文体の相関値は非常に高く，同一人物のものと十分認定できるが，第二のマカロック論文二本とオウエン批判論文との間の相関値は非常に低く，同一人物の文体とは考えられないことが明瞭に示された。これは，先の歴史的理論的推論を補うに十分な傍証といえよう。

以上のほかは，[13] Thweatt にも [14] O'Brien にも見ごたえのある新たな情報はない。オブライエンらが，マカロックは剽窃家ではない，とするのに対して，スエットは，マカロックもトレンズも自分の文章を他の場所で再利用するという意味で Self-plagiarizers であるばかりでなく（このことはオブライエンも認めている），他人の文章を引用の註記なしに頻繁に利用するという意味で剽窃家であったとして，いくつかの例をあげるが，オブライエンらは，そのような片言隻句をいちいちあげつらっていたら，誰でも皆剽窃家になってしまうと反論し，スエットが電算処理を恣意的なサ

ンプル抽出によるものと批判して，代わりにマカロックとトレンズがイタリック体で強調しているところを比較し，文体の相関値を検討して違う推論を示せば，オブライエンらは，イタリック体は当時編集者や印刷所が勝手に行ったもので，出版社によって違うから文体比較のきめてにはならないと反論する。少々泥試合めいてきたが，どうやら勝負はあったようである。

しかし，[21] G. de Vivo 1985 は，この論争で両当事者とも見落としている明瞭な証拠があるとして，*Torrens, Essay on the external corn trade,* 2nd ed. 1820. をあげる。これは1815年が初版であって，第二版はオウエン批判論文が刊行されてから僅か数週間後に出版されたが，そのなかには，この問題の論文と殆ど同じ文章が新たに追加されている。これは筆者がトレンズであることの有力な証拠であるとヴィヴォは主張するのである。このヴィヴォ論文にはスエットの反論がつけられているが，その論旨はトレンズもマカロックも剽窃家であり，特にこの指摘された部分はトレンズのロンドン講演の書き換え，もしくは文字通りの抜粋であるから，トレンズが利用できたのは当然だし，オウエン批判論文の「筆者」マカロックも，元がトレンズのものだから，そうした「剽窃」を咎めなかったのだとする。スエットは，シスモンディ批判の部分がマカロックの「オリジナル」，他の二部分はトレンズからの「剽窃」，そして全体の執筆はマカロックと主張するのだから，ヴィヴォの出したような証拠には聞く耳を持たぬのである。これでは，しかし，筆者を精力的に捜すこと自体が殆ど無意味になりそうである。（以下次号）